



永山 祐子 (ながやま ゆうこ) 氏

1975年東京生まれ。1998年昭和女子大学生生活美学科卒業。1998-2002年青木淳建築計画事務所勤務。2002年永山祐子建築設計設立。主な仕事として「LOUIS VUITTON 京都大丸店」、「丘のある家」、「ANTEPRIMA」、「カヤバ珈琲」、「SISI」、「木屋旅館」、「豊島橋尾館(美術館)」、「渋谷西武 AB 館5F」、「女神の森セントラルガーデン(小淵沢のホール・複合施設)」、「ドバイ国際博覧会日本館」など。ロレアル賞奨励賞、JCD デザイン賞奨励賞(2005)、AR Awards (UK) 優秀賞(2006)「丘のある家」、ARCHITECTURAL RECORD Award, Design Vanguard (2012)、JIA 新人賞(2014)「豊島橋尾館」、山梨県建築文化賞、JCD Design Award 銀賞(2017)、東京建築賞優秀賞(2018)「女神の森セントラルガーデン」、照明学会照明デザイン賞最優秀賞(2021)「玉川高島屋 S-C 本館グランパティオ」など。現在、新宿歌舞伎町の高層ビル(2022)、東京駅前常盤橋プロジェクト「TOKYO TORCH」などの計画が進行中。
<http://www.yukonagayama.co.jp/>

Link+

地域に根差す建築とは？

What is architecture rooted in the community?

建築家 永山祐子氏 × 大林組設計部 佃和憲 / 石塚昌子 / 伊達翔 / 太田裕人 (司会: 梅野麻希子)

Architect Yuko Nagayama and
 OBAYASHI CORPORATION Architectural Design & Engineering Division

Kazunori Tsukuda / Masako Ishizuka / Sho Date / Hiroto Ota
 moderator: Makiko Umeno

近年、私たちを取り巻く環境は大きく様変わりした。特に新型コロナウイルスの影響は、特定の場所にとらわれないバーチャルなコミュニケーションを強く促した一方で、人や社会とリアルに関わることの重要性も私たちに再認識させた。建築がこれからも変わらずリアルなものであるならば、現実のコミュニティである「地域」との良好な関係性は、今後更に求められていくだろう。では、地域の人々と連携して建築が使われるためにはどうすれば良いだろうか。そのために設計者は何をすべきか。それらの課題をテーマに、2021年6月、当社設計部有志にて建築家・永山祐子氏とのトークセッションを開催した。地域に根差す建築とは、どのようなものだろうか。お互いの作品を紹介しながら、地域と建築の関わり方を探った。

(注) 本記事の英訳は、WEB版ARCHITORIUM内、JOURNALよりご覧いただけます。(巻末にQRコード掲載)

In recent years, our reality has changed dramatically. While the COVID-19 crisis spurred the expansion of virtual communication, it also reminded us of the importance of "real" interactions with others and society. As long as architecture maintains its physicality, forming strong relationship with physical communities will be more crucial. Our Architectural Design & Engineering Division staff discussed this issue with architect Yuko Nagayama in June 2021 and, by looking at each other's projects, we explored the relationship between architecture and community.

*English version of this article is available in the JOURNAL of the web edition of ARCHITORIUM. (QR code attached at the end of the magazine.)

Yuko Nagayama- TESHIMA YOKOO HOUSE / JINS PARK

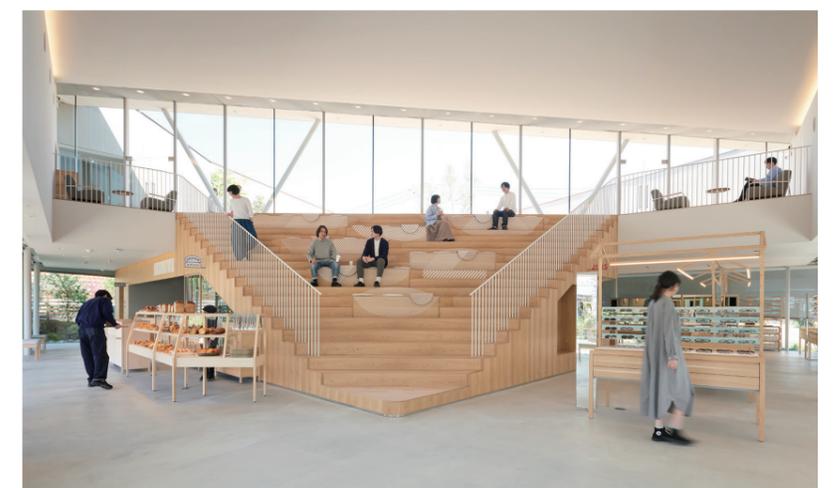


地域に開く、地域を取り込む

梅野麻希子 (以下、梅野) 永山さんは当社が施工したドバイ国際博覧会の日本館の設計をされていて、そのご縁で本日のトークセッションにお招きしました。まずは永山さんの作品の中で、特に地域との関係性が深い建築を紹介していただけますでしょうか。

永山祐子氏 (以下、永山氏) まず豊島横尾館は、瀬戸内の豊島の港近くにある古民家をリノベーションした横尾忠則さんの美術館です。赤いガラスのスクリーンで日常と非日常の境界線をつくったり、庭や塔にはインスタレーションを配置しています。この民家は、長い間誰も住んでおらず崩れかかっていたのですが、リノベーションにあたり地元の皆さんがワークショップでアート作品の庭の川床のタイル貼りをしたり、オープン前には餅まきイベントをしたりと、建築途中の段階から地元の人に知ってもらえる機会を積極的につくっていききました。そのおかげで、オープンしてからは地元の人が外部の人を案内してくれるような場所になりました。このプロジェクトを通して、地域との関係性を丁寧に構築

していくことが大切だと感じました。次に、群馬県前橋市にあるJINS PARKは郊外にあるロードサイド型の施設です。通常JINSの店舗は駅ビルのようなコンビニエントな場所にあり、気軽にメガネを買うお店、というイメージですが、JINS PARKはこの施設を目的に訪れる人々を意識する必要がありました。地域の人に足繁く通ってもらえる場所になるにはどうしたらいいかということを考えました。このプロジェクトの肝になっているのは配置です。駐車場を奥に確保し、手前に建屋と庭を造って「PARK＝公園」になるよう意識しています。室外だけでなく室内も、公園のように好きな場所を選んで座れるようにし、日常的に利用できるバン屋さんも併設しました。このバン屋さんは、JINSが自ら運営しています。建物の構成としては、中に入った瞬間に見える風景がすべての要素になっていて、パースペクティブに見渡すことができますし、空が抜けるよう立体的にもつなげています。階段の裏はトイレやスタッフ用のバックヤードです。公園という名の通り、色々な人が訪れてお気に入りの場所を見つけ、リラックスして過ごしていただける場所になったと思っています。



Kazunori Tsukuda - TAISHO UNIVERSITY BUILDING #8



様々な居場所を見出させるための検証

佃和憲 (以下、佃) 大正大学8号館は、ラーニングcommons、図書館、礼拝ホール3つの用途を合わせた建築です。(p.04参照) 大学自体は10年以上前から地域に開かれた学び舎を目指していて、この建物もそのような施設にしたいという大学側の想いがありました。学生の学びと集いの場をつくるという要望も汲み、「知と集いの渓谷」というコンセプトを設定し、様々な場所を創って、意図的につなげていく空間創りを行いました。

JINS PARKや常盤橋プロジェクトなどを拝見し、永山さんは色々な居場所を選択できることを大事にされているのかなと感じました。大正大学8号館も個々人にとって心地良い場所を選べるようにしたのですが、そうした空間を創るときに大事にされていることはなんですか。

永山氏 人が居場所を選ぶときは、そのときどきで選ぶスケール感が違ってくると思います。そうしたときに、シチュエーションごとにどのようなスケールが適しているのかを細やかに考えてつくっていくのが大事

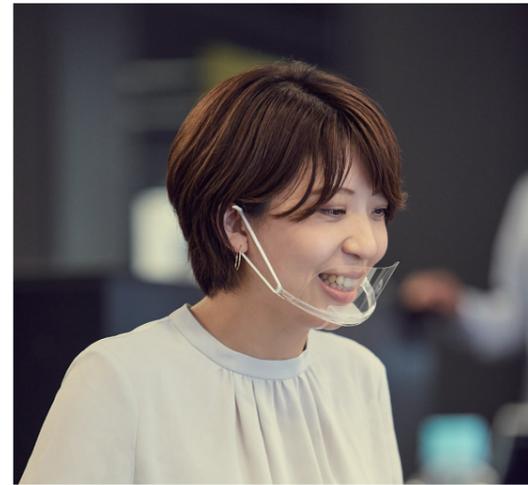
で、私もそこに気を使っています。その場に置く家具の大きさや置き方、人の動きなど、実物のスケールを模したもので何度も検証しながら決めていきますが、なんとなく心地いいという人の気持ちの中に寸法的な理由があるかなと思っていて、そこを自分なりに分析できたらいいですね。

佃 JINS PARKは居場所の選択性のバランスがすごいですよね。

永山氏 あらゆる要素が関わってくると思うので、総合的にそこが居場所として認知できるかを検証しました。JINS PARKは階段が扇型に広がっていますが、あれは座ってもらうための階段だから、人はどんなきっかけで階段に座ろうとするのかを考えました。テーブルがあってカップを置きそうだというのかな?とか。ちょっとしたきっかけが人の行動を促すので最初の1人に座ってもらう工夫が実はポイントになりますね。



Masako Ishizuka - Headquarters KCON Co., Ltd.



地域の人を集める広場

石塚昌子 (以下、石塚) 私は建材メーカー・ケイコンの本社ビルの建て替えを行いました。(p.24参照) ケイコンは京都・淀本町の淀城跡地内に本社を構えて80年以上。建て替え工事には二の丸の城壁も発掘されました。そういった経緯から「淀の遺跡を基に地域・社会へ開くニューオフィス」として棟配置の中心に大きな広場を設け、地域住人を巻き込んでお祭りなどのイベントを開催できる仕掛けをつくりました。JINS PARKでも屋上の「うえひろば」がありますが、配置構成や地域への開き具合など、どう検討されたのですか。

永山氏 階段の上の広場は子供たちが迷子にならないし安心して遊べるから、その様子を見て親がベンチでリラックスできる。子育て世代がどれだけリラックスできるかという点に配慮しました。

地域に開くとき、具体的にどう開いたらいいだろう?と思うことがあります。実際に施設ができた際に、地域の人に使ってもらわなければ意味がないですね。ターゲットを設定し、可能であればその人たちが

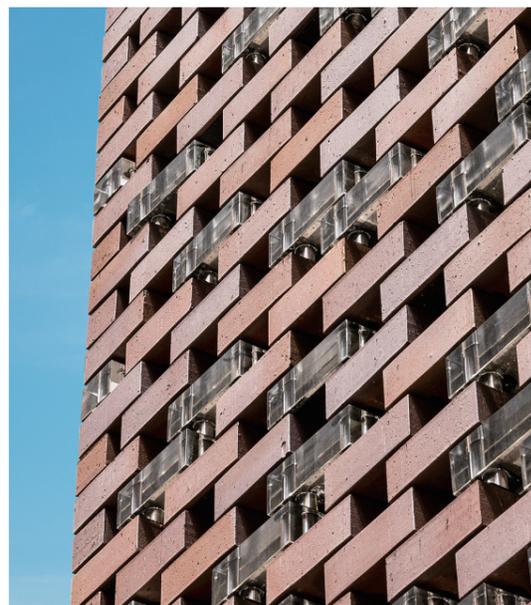
どのように使ってくれるのかをヒアリングします。設計者の新しい発想も大事だし、運営者がどこまで理解してコミットしてくれるかが重要で、早い段階からユーザーからのフィードバックをもらいながら、最初のイベントは一緒に行くこともあります。その後、何十年も使い続けてもらいたいし、そのうち「こんな使い方も」と事業者や地域の人たちから自然発生的に声があがってくると、うれしいですね。

石塚 JINS PARK内のパン屋さんはとても良いアイデアだと感じましたが、それも永山さんから提案されたんですね。

永山氏 JINS側から子育て目線で提案してほしいと話があり、「お母さんと子供のため」というテーマが良いと思って提案しました。美味しいパンを子供たちと食べて自分にもっこりできる場所です。ちなみにパン屋さんはテナントを入れるのかと思ったら、自分たちでやろうとJINSの中でパン屋の新規事業が立ち上がったんです。メガネのコンテンツだけで人を集めるのが難しいかもしれないと考えて、飲食業はハードルが高かったけど覚悟をもって進めていただいたので、これからあの場所がますます面白くなっていくんじゃないかなと期待しています。



Sho Date - DAIKO Lighting Core Sapporo



地域になじむ、地産地消の素材

伊達翔 照明メーカー・大光電機ライティングコア札幌のショールームを建て替えました。(p.26参照) 施主の希望で予約制としたため、誰でも自由に中に入れるわけではありませんが、ファサードだけでも地域に愛されるものを目指しました。使用したのは、北海道遺産といわれる江別レンガ。展示室には自然光を入れず、事務フロアには自然光を入れるという条件があり、光を取り入れる手段としてガラスブリックも使った透かし積み工法にしました。そこで素材の観点でお話を伺いたのですが、JINS PARKの屋根部分は銅板葺ですよね。銅板を選んだ経緯を教えてくださいませんか。

永山氏 もともと「PARK」なので周りに植物や土を置くことは前提で、そこになじむ色は茶色のような暖かみのある色だろうと考えていました。JINS PARKからは遠くに赤城山が見えて、山の赤茶っぽい色とも合うなど。燻しの銅板を5、6色使って、それを組み合わせています。何色が組み合わせるとムラができて、レンガもそうですが焼きムラのような部分があると自然の風合いが出て、優しい表情になります。

あと、傾斜する屋根に対して覆っている銅板を折ると、施設の側面に斜めの線が出ます。その線が活かされて、施設を包むように屋根からつながっている様子がわかります。夜になると銅板葺の斜めの線のところに光が当たり、立体感を表層につける役割も果たしていますね。



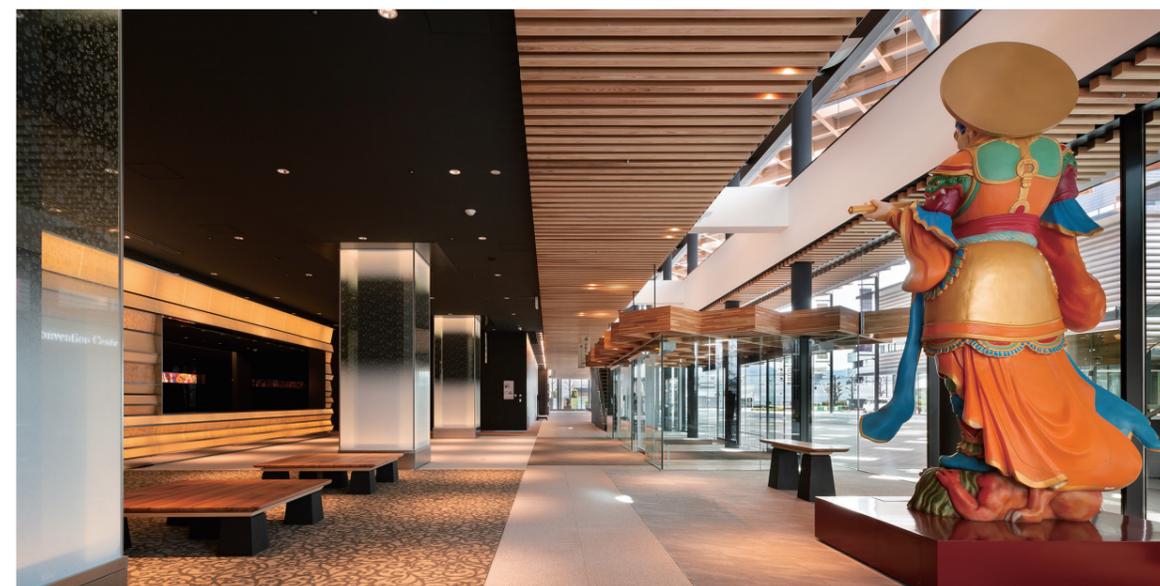
Hiroto Ota - Nara Prefectural Convention Center



その土地の文化や歴史を取り込むには

太田裕人 (以下、太田) 私が担当した奈良県コンベンションセンターは国際会議の拠点であり、商業施設やホテル、放送局などが入った大型施設です。(p.14参照)「地域に根差す」というテーマに即してどれだけ奈良らしさを体現できるかという点に注力しました。天平文化のモチーフを入れ、県産の素材、たとえば吉野杉、吉野椴皮(よしのひわだ)、奈良晒(ならさらし)などを使用。東大寺正倉院を想起させる校倉造(あぜくらづくり)の外壁と列柱を取り入れ、若手を中心とした多数の県内アーティストを起用して、建物全体を構築しています。永山さんの建築も地域の歴史や文化をモチーフとしたプロダクトレベルの小さな単位からアプローチをされているようにもお見受けしました。かなり個性の強い地域に建てることになった際、その地域の文化にどのようにアプローチし、建築に取り込むか教えていただけますか。

永山氏 事前に地域の歴史やコンテキストを調べるのは当然ですが、そこから何を選び取るかは設計者の個性になるし、建築そのものの個性になります。ストーリーは大事だけど、それが説明的になると面白くない。それより、選んだストーリーが建築にとって効果的であるかが大事で、そこに文化や歴史を取り入れる意味があると思います。リサーチをきっかけに今まで知らなかった材料に出会ったり、新しい発見があったり。それぞれの場所にそれぞれの材料があって、どう調理したら美味しくできるか、今まで見たことのないものをどう扱ったら魅力的になるのか。そんなワクワク感がそれぞれの場所に備わっているのが建築の面白さであり、地域ごとに建築をつくるときの楽しさだと思っています。太田 個性が強い土地における建築を考えることは個人的に楽しいですし、建てるまでの過程で、面白いと思える気持ちは大事にしていきたいです。「どういうふうを選び取るのが建物の個性になる」というお話も、今後はさらに突き詰めていきたいですね。





地域に根差すためにすべきこと

梅野 当社設計の建築をいくつか紹介させていただきましたが、永山さんにとって印象に残ったり、共感していただけた部分はありますか。

永山氏 四者四様でしたが、印象的だったのは素材感です。大正大学8号館の光のスクリーンは館内に優しい光を満たしていて、素材感が感じられました。奈良県コンベンションセンターのお話にあった「奈良の木をどう使うか」などは、まさに今私が地方で仕事をするときの楽しみと一緒に、地元の素材をどう調理するとどんな効果が現れて、それが建物にどう影響するのかを考えます。札幌の江別レンガもそう。その地域の特徴あるものをうまく使う視点が面白かったです。ケイコン本社ビルは、アプローチにストーリー性があって、広場で地域のみなさんがイベントする風景が素敵。会社という場所が地域密着であるよう

に使われるなんて、なかなかないですよ。クライアントとはいわゆる共犯関係とも言える密接な関係性を作らないと自発的に使ってもらえないので、きっとクライアントと密にお仕事をされたのだと感じました。「地域に根差す」というテーマは本当に大切ですが、私たちにできることには限界があるので、そこを理解していただくためにクライアントとは1つのチームとしてやっていくことが大事ですね。豊島横尾館のときは、地域の人に最終的に受け入れてもらえるようになるまでに色々なプロセスがありました。そういったことは細やかにやっていく必要があるなど実感しました。

梅野 その中で、ストーリーは大事だけれどあまり説明的にしない、というお話がとても印象的でした。施主さんと1つのチームをつくり、どうやったら説明的にならずに地域の人の腑に落ちるものにしていくのか、そこが大事なのだと心に響きました。

